

がんサロン訪問における「患者・家族の声を聴く」 看護学生の倫理的学び

平野 文子・別所 史恵・坂根可奈子

概 要

看護教育において看護の対象者についての理解を深める教育方法として、がん患者とその家族が集い、情報交換や交流を行なうがんサロンへの訪問を行っている。「患者・家族の声を聴く」ことによる看護学生の倫理的学びを課題レポートから質的に分析し、明らかにした。

学生は<人間の生命, 人間としての尊厳><知る権利, 自己決定のための支援><信頼関係の形成とそれに基づく看護><プライバシーの保護・尊重><専門職をめざした自己研鑽><謙虚に学ぶ姿勢>の6カテゴリー, 23サブカテゴリーについて学んでいた。当事者の「声を聴く」ことにより、看護者としての倫理的ケアへの感受性や問題意識を養う機会となることが示唆された。

キーワード：がんサロン, 声を聴く, 倫理的学び, 看護学生

I. はじめに

看護教育において、看護の対象者の理解を深めるための方法論としていくつかの試みがなされ、報告がある(田島他, 1999; 山勢他, 2000; 松村, 2002)。そして、専門教育の中に患者の体験していることについて知る機会を組み入れることの重要性についてはKatzがその著書で述べている(Katz, 1993)。

近年では、看護の対象となる人たち(以下、当事者)の話を書くことで、看護学生(以下、学生)は当事者のありのままの姿を実感し、また当事者に勇気づけられ、看護の学修へと強く動機付けられることが報告されている(森川, 2006)。本学でも招致講義の講師として患者・家族を招き、当事者参加型の授業を取り入れて、その成果を示した(平野, 2007)。しかし、生活者としての理解が求められるようになってきたこと、学生のコミュニケーション能力の育成が必要となってきた背景から、当事者の暮らす場所、あるいは集う所に赴いて、実際の暮らしぶりや価値観などに関わる生の声を聴くことが患者・家族のさらなる理解につながると考えた。

また、2007年に施行されたがん対策基本法においても、2008年から始まった後期高齢者医療制度においても、患者の意向を尊重することが大きく掲げられている(角田, 2008)。近年の社会背景の変化に伴い、人々の求める医療従事者への期待はさらに大きくなり、2009年の看護基礎教育のカリキュラム改正では、“看護倫理教育”が看護職の行動の基盤として求められるようになってきた。「看護師として倫理的な判断をするための基礎的能力を養う内容」が明示され、これまで以上の強化が求められている(山本, 2010)。

そこで、地域に暮らす人々の実際的な取り組みや体験を理解し、がん患者の視点から対象理解を深められること、倫理的な学習姿勢を養うことをねらいとして、がん患者とその家族が集い情報交換や交流を行なう「がんサロン訪問」を取り入れた。ここでは、その教育方法を紹介すると共に、学生の学びを明らかにすることである。

II. 研究目的

がん患者とその家族が集い、情報交換や交流

を行なうがんサロン訪問における「患者・家族の声を聴く」ことからの学生の倫理的学びを明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 用語の定義

- 1) 当事者：患者・家族及びその関係者などの看護の対象であり、各々の立場においてニーズを有する者。
- 2) がんサロン：がん患者や家族が集まり、がん告知後の様々な思いを自由に話したり聞いたり、情報交換ができる場所で、地域がんサロンと病院内がんサロンがある。

2. がんサロン訪問の概要

1) がんサロン訪問学習の位置づけ

(1) 目的

地域でがんと共に生きる患者とその家族によるがんサロン活動に参加し、療養生活およびニーズや支援に関する現状と課題を理解し、がん看護について考察する。

(2) 科目の位置づけ

3年課程の看護短期大学3年次生の開講科目：成人看護特論（必修選択科目）15時間

2) 展開方法

- (1) がん患者とその家族による自主グループ活動の実態について文献学習・参加学習を行う。
- (2) がんサロンに集う人々のニーズや支援に関する主題を取り上げる。
- (3) 主題について、当事者・関係者と共に意見交換をする。
- (4) 学習テーマの焦点化と展開方法
 - 1回目：ガイダンス
 - 2～6回目：がんサロン活動への訪問・参加学習の計画と実施
 - 7回目：学内でのまとめ
 - 8回目：がんサロン・関係者（行政など）への学習報告・意見交換会

学生は、学習テーマを見出すための初回の訪問を行い、訪問のまとめと文献学習をする。その後、学習テーマをグループで決定し、学習テーマに基づいたデータ収集のための訪問計画書の作成、訪問の実際・インタビューなどを行う。

訪問や学習発表時における倫理的な配慮について事前学習をして臨むこととしている。

8回目の学習報告・意見交換会終了後、課題レポートを作成する。「がんと共に生きる患者とその家族のニーズ・支援」に関する学習内容を上記の学習過程を振り返りながら、各自がテーマ設定し、作成する。

3. 研究方法

1) 対象

3年課程看護短期大学の成人看護学特論を選択し、課題レポートを研究データとして使用することに同意した3年次生20名。

2) データ収集期間

2007年6月～2008年9月

3) データ収集方法

がんサロン訪問と学習報告・意見交換の演習後、学生が提出した「がんと共に生きる患者とその家族のニーズ・支援」に関する課題レポート（2000字）を自由記載する。レポートの提出は演習終了後、2週間以内とした。

4) 分析方法

内容分析。レポートの記述内容を1文脈単位で倫理に関する学びを示した部分を抽出し、研究者で意味内容を解釈しコード化した。さらに複数のコードを整理・統合し、カテゴリー化した。

5) 倫理的配慮

本調査を実施するにあたり、大学の研究倫理審査委員会による承認を得た。学生に対しては、教員が本研究の目的と方法、成績には一切影響しないこと、自由意思に基づく調査であること、結果の公表においても匿名性を確保することなどを科目評価後に文書と口頭で説明した。そして、同意の得られたレポートのみデータとして取り扱った。

Ⅳ. 結果

がんサロンを訪問し、当事者である患者・家族の声（資料、写真）を聴いた学生の課題レポートから次のような意見・学びがあった（表1）。

【人間の生命、人間としての尊厳】【知る権利、自己決定のための支援】【信頼関係の形成とそ

資料 〈がんサロン訪問で聴いた当事者の声（例）〉

患者Aさん

「病名や病状などそれぞれに違いますが、サロンでは同じような思いを持った人が集まりますから、家族にも言えないことも素直に言い合えます。家に引きこもっているよりも、ここに居たほうが落ち着きますし、癒されます。

しかし、やはり、患者は常に頭のどこかで死への恐怖を抱えているものです。時々、死に対する恐怖心に襲われます。がんになることは、死を意識すること、この気持ちは患者となった者にしか解からないでしょう。だからこそ、痛みを解かろうとする姿勢が大切で、患者の本音を理解できる看護師になってもらいたいですね。関心を向けて声をかけてもらったり、痛い時には背中をさすってもらだけでも楽になれます。

そして、患者の自律を促す看護をしてもらいたいと思います。そのためには芯の通った賢い看護師になってもらい、専門的な知識を備えていてくれたら心強いです。“Cool head & Warm heart！” がんに強い認定看護師や専門看護師を目指してほしいですね。」

患者Bさん

「これからの患者も賢くならなくてはいけないと思います。医療のプロにかなうことは当然できないですが、患者が考えを述べ、主体的になることはとても大切です。医師に直接質問し、対話できるように努力をしなければならないと思います。このサロンでも月々テーマを設けて学習会をしていますよ。

世間に残る「がんは不治の重い病気」というイメージや、体質遺伝するという風潮があります。これを変えるためには、患者が訴えていく必要があるでしょう。しかし、まだまだ患者の意思表示をする場が少なすぎます。医療を受ける側と提供する側が同じ土俵で話せる場がほしいです。また、県や地域でがんに対する正しい知識を広げることが必要と感じます。患者・家族、医師、看護師などの専門職者、行政や関係者みんなが改善していこうとする意識を持ち、それを声に出せる環境づくりが大切だと思います。」

患者Cさん・家族Dさん

「病気のことでなく、多額の治療費に伴う経済的な不安、社会復帰への不安と戸惑い、治療をしながら日常生活をしていく上での不安など、退院してから体験する悩みが多く出てきます。患者の病名が一人ひとり違うように、家庭環境も違えば、大切にしたいことも当然違います。しっかり向かい合って下さるととても心強く、嬉しく感じます。」

「今は情報が溢れている時代ですが、正しく的確な情報がないことに困っています。情報がないことが患者にとって一番不安です。サロンでは様々な体験をもつ患者や家族同士、情報を交換して助け合っていますが、退院後の生活について説明が不十分で困った、不安だったなどの声は多く聞かれます。忙しい医師の代わりに、看護師さんが日常生活全般のことを指導してくれると助かるでしょうね。家族も患者同様に退院してからの生活に戸惑います。」



写真1 がんサロンに集う患者・家族



写真2 看護学生のがんサロン訪問学習



写真3 学習発表・意見交換会

れに基づく看護】【プライバシーの保護・尊重】
【専門職をめざした自己研鑽】【謙虚に学ぶ姿勢】
の学びを認め、それは6カテゴリー、23サブカ
テゴリーに分類できた(表2)(カテゴリーは
【 】、サブカテゴリーは<>で表す)。

学生は、がんという診断を受け、<今、この
瞬間を大切にしながら真剣に生きる患者と家族
>は、残された人生を<目標を持って自分らし
く生きている>と感じ、そこには<等しく、か
けがえのない尊い生命>があることを学んでい

た。「10人なら10人のがん体験がある」と、そ
の<生き方・価値観は十人十色>であり、【人
間の生命、人間としての尊厳】があることを学
び取っていた。

また、よりよく生きるには、<自分の病状を
理解するために必要な情報提供>が大切であ
り、<自己選択・自己決定する患者の力>を認
め、<自分らしい治療・検査・セカンドオピ
ニオンの選択>ができるように【知る権利、自己
決定のための支援】の必要性についても学んで
いた。時には<患者の代弁者としての意思の尊
重>が求められたり、<知りたくない・知らさ
れたくない>思いがあることも理解していた。

そして、人生の様々な思いを語ってもらうに
は<誠実で礼儀正しい態度・姿勢><相手の価
値観・生き方を尊重する>【信頼関係の形成と
それに基づく看護】が必要であることも学んで
いた。それには<相手の力を信頼して見守る>
ことや、<専門的な知識・技術によるニーズの
充足>があって、はじめて信頼を得ることだと
感じていた。

聴かせて頂く内容が非常に個人的・深刻であ
ることから<知り得た情報の深刻さ・個人的な
内容への戸惑い>を感じながらも、<信頼関係
に基づく個人情報の提供と遵守><守秘義務の
遵守への理解>など【プライバシーの保護・尊
重】についても学んでいた。また、【専門職者
を目指した自己研鑽】として、まずがん患者・
家族の苦悩とニーズの理解>が重要であり、<
専門的な知識・技術・態度の育成>や<自分自
身の死生観の育成>が必要だと理解していた。

そして、がん患者と家族への支援をしていく
上で、今の自分はあまりに<看護者として未熟
>であると自覚しており、<当事者の声に真摯
に耳を傾け><相手の立場になって考える>
【謙虚に学ぶ姿勢】が必要であると学んでいた。

V. 考 察

以上の結果から、がんサロン訪問における「患
者・家族の声を聴く」倫理的な教育効果につい
て考える。

1. 生命・人間としての尊厳について

表1 がんサロン訪問後の学生の意見・学び

<p>1. 人間の生命、人間としての尊厳について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・転移や再発・予後への不安など不確かさの中で生きているがん患者さんにとって、一日一日が大切で貴重な時間である。残された人生を大切に、そして真剣に生きていると感じた。家族もまた同じような気持ちで一緒にいる時間を大切にしていると感じた。 ・「今」「このひと時」を意識して療養している患者さんご家族であった。 ・同じ24時間でも、がん患者さんと私たちとの質がこんなにも違うことに驚いた。 ・生や死について考えさせられた。私も人生の目的をしっかりと持って、患者さんのように真摯に生きていきたい。 ・生命の大切さを強く感じた。生命の重さは同じで尊いものであるのに、医療格差で助かる生命も助からない状況があることを知って驚いた。 ・10人なら10人のがん体験がある。がんと診断されてからの受け止め方は個人によって違うし、全く同じ体験をしている人はいない。 ・これまでの医療は、患者さんの病気中心で、生活者としてのその人を困む環境や価値観、個人史を無視していたのではないか。また、患者さん一人ひとりの個別の苦しみや悩みを軽視してきたのではないだろうか。 ・医療者が患者さんの身近な存在となるためには、患者さんご家族の心情を理解しなければならない。患者さんの目線に立って抱える苦しみや悩みを共有し、ひとりの人間としてのその人の価値観や信念を大切に一緒に問題解決に向かう姿勢を大切にしたいと思った。 <p>2. 信頼関係の形成とそれに基づく看護について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・信頼関係を築くためには、あいさつや笑顔、誠実な態度、患者さんの立場になって考えられること、そして患者さんにあつたケアの提供などが大切だと思う。 ・患者さんと同じ土俵に立ち、話を聞かせて頂く、そのプロセスを通して信頼のある看護に至ると思う。 ・情報提供も信頼関係を築く上で必要なことだと思う。看護師という専門職の立場から患者さんに情報提供できるだけの知識を身に付けておくことが必要である。 ・看護師は専門職としての自覚を持ち、相手に安心感を与えるような態度で接し、どんな話でもきちんと向き合って聴くなど日々の関わりによって、信頼関係の構築をしていくことが必要だと考える。 ・気持ちを打ち明けられたときには、そばに寄り添い、患者さんやご家族の思いを映し出す鏡となり、気持ちの整理・価値観の転換を助ける役割を担うことも必要である。 ・がんやそれらを取り巻く制度など社会状況に対してアンテナを高く張ること、患者さんのニーズに応えられるように知識を身に付け、深めるための努力を惜しまないことが大切だと感じた。そのようにしておくことで患者さんの悩みや不安を解消できるとともに、信頼関係も築いていけるのだと思う。 <p>3. 知る権利・自己決定について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・等しく情報提供をして、患者さんご家族が希望する治療や人生の選択ができることが重要である。 ・患者の身近かにいる看護師は、時には患者の代弁者ともなり、患者の望む医療の選択に力を注ぐべきだと思う。 ・これからの医療は、患者さんが自分で治療を選び、病気に向き合っていく時代であると感じた。患者さん自身が問題意識を持ち、自分のこととして主体的に取り組む強い意志と力を持っていることを実感した。この主体性をサポートし、発揮できるような支援が必要だと思う。 <p>4. 看護職者として、自己のあり方について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者さんやご家族の声を聴くこと、そこから看護の第一歩が始まると思う。 ・専門職としての知識を身に付け、深めるための努力を惜しまないこと、が大切であると感じた。 ・それぞれの役割を担う多くの他職種医療者が互いに連携を持ち、患者の情報を共有して本人の希望・選択などの自主性をそれぞれの専門職がサポートしていくことが重要である。患者の身近かにいる看護職が医療者との賭け橋になる役割が重要だと思う。 ・患者さん自身の持つ主体性や問題解決する力を尊重しながらサポートすることが大切だと思う。 ・患者さんの目線に立って抱える苦しみや悩みを共有し、ひとりの人間としてのその人の価値観や信念を大切に一緒に問題解決に向かう姿勢を大切にしたいと思った。 ・本当の意味で患者・医療者・行政が対等でお互いの意見を言い合えるような関係をつくっていかなければ、真の「患者中心の医療」は成り立たないと思う。 <p>5. 当事者の声から学ぶということ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いくら患者さんの気持ちを解ろうと頑張っても、がんを告知され、予後への不安を抱える気持ちを本当に理解することは難しく、限界がある。患者さんの気持ちを解りたいと思ったら、実際に現場に足を運び、患者さんの顔を見ながら自分の耳で生の声を聴くことが一番の近道であるし、欠かすことのできないものだということを実感した。 ・様々な患者さんの声を直接聴くことで、はじめて患者さんの気持ちに近づくことができる。そうすることで患者さんの心境・ニーズが把握でき、どのようなケアが求められているのかを理解して、実践につなげることができる。 ・話を聴くということがどれだけ看護として重要であるかと改めて感じた。薬や医学では癒えることのない人の苦しさや痛みは、また人の力でしか治せないと思う。まずは「傾聴する」、これからの看護の原点にしてきたい。
--

表2 サロン訪問による看護学生の倫理的学び

カテゴリー	サブカテゴリー
人間の生命、 人間としての尊厳	<ul style="list-style-type: none"> ・今、この瞬間を大切にしながら真剣に生きる患者と家族 ・目標を持って自分らしく生きる ・等しく、かけがえのない尊い生命 ・生き方・価値観は十人十色
知る権利、自己 決定のための支援	<ul style="list-style-type: none"> ・時分の病状を理解するために必要な情報提供 ・自分らしい治療・検査・セカンドオピニオンの選択 ・自己選択・自己決定する患者の力 ・患者の代弁者としての意思の尊重 ・知りたくない・知らされたくない病気の現実
信頼関係の形成と それに基づく看護	<ul style="list-style-type: none"> ・誠実で礼儀正しい態度・姿勢 ・相手の価値観・生き方を尊重 ・患者の力を信頼して、見守る ・専門的な知識・技術によるニーズの充足
プライバシーの 保護・尊重	<ul style="list-style-type: none"> ・知り得た情報の深刻さ・個人的な内容への戸惑い ・信頼関係に基づく個人情報の提供と遵守 ・守秘義務の遵守への理解
専門職者を目指し た自己研鑽	<ul style="list-style-type: none"> ・がん患者・家族の苦悩とニーズの理解 ・専門的な知識・技術・態度の修得 ・自分自身の死生観の育成 ・健康管理の必要性の理解
謙虚に学ぶ姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・看護者としての未熟さの自覚 ・当事者の声に真摯に耳を傾ける ・相手(当事者)の立場になって考える

一般的に「がん＝死」とイメージしやすい現実があり、告知を受けたことで誰もが生命の限りを強く意識する。がんサロンではそのようながん患者・家族が集い、時に予後への不安を率直に語ったり、あるいは希望を持ちながら一日一日を大切に生きていく姿を目の当たりにする。そのような場を訪れることで学生は、有限の生命を生きる人々に直に触れ、その語りを聴くことで、かけがえのない生命の尊さを学び取っていたと考えられる。そして、死を意識しながら一日、一時間、その瞬間を懸命に生き続けるがん患者の姿から、学生達に今をどう生きるかを問う機会ともなっていたと考えられた。

「10人なら10人のがん体験がある」と学生が学んでいるように、患者や家族には一人ひとりが異なる生活環境や価値観・信条があり、それぞれの地域社会・家庭での役割を果たしながらがんという病に向き合っている。単に診断名や治療・症状の違いだけでなく、病の受け止め方やそれを支える周囲のサポート・対処の方法に

も個性や違いがある（名和，2003）。そのことに学生も着目していた。

また、病気と向き合い、患者である自分たちの声を行政に提言し、前向きに生きる患者の姿から、がん患者は支援を必要とするだけでなく、実践力をもつ、能力ある人としてとらえる機会ともなっていた。このような視点で患者をとらえることは、一人の尊厳ある人間としての理解に繋がると考えられた。

2. 信頼関係の形成とそれに基づく看護について

がんサロンで初めて出会う患者や家族に、個人的な病との歩みや人生への様々な思いを語ってもらうには、まず自分を知ってもらい、信頼を得ていく必要がある。笑顔できちんとあいさつし、現在の学習や今後の看護に活かすという学習目標を持つ学生として訪問しているということ、一生懸命に学ぶという姿勢で臨み、守秘義務を守ることを伝えるなどが大切である。このような姿勢で臨み、相手から了解を得られて、

初めて語ってもらうことができる

看護は、対象となる人との間に築かれる信頼関係を基盤として成立している（角田，2008）。信頼は、そのための基本的な姿勢，説明と同意を得る過程を経て，また学習内容を報告する場を設けるなどの真摯に学ぶ姿勢から得られていくことを，体験を通して学ぶことができていた。

また，相手の立場を尊重し，思いを受け止め共感的に聴くことこそが重要であることに気づいていたと考えられる。

3. 主体的に生きる力（意思決定・実践力）について

学生が思い描く「患者像」は，通常医療者の支援なくしては生きられない「弱者」となっていることが少なくない（名和，2003；平野，2007）。しかし，がんサロン訪問で出会う患者は，様々な方法を用いながら，自ら非常に多くの情報を得ている。そして，それらの情報の中から，治療法の選択や決定を行いながら，主体的に生きている。このように主体的に生きる患者の能力を認め，その能力が発揮できるためには，患者の知る権利を守り，自己決定のための情報提供が重要であることも学んでいたといえる。

4. プライバシーの保護・尊重について

がんサロンで患者・家族から聴く内容は，人には言えない，時には家族にさえも言えない「がん」という病への思いや，将来や経済面の心配など，実に様々で個人的・深刻なものが存在している。その内容のあまりの深さと多様さに学生は，本当にこのような大事なことを自分も聞かせてもらっていいのだろうか戸惑うこともしばしばである。

このように，個人的・深刻な情報を得る機会が多いために，プライバシーの保護や知り得た個人情報の取り扱い，守秘義務の遵守について深く学ぶ機会となっていたと考えられた。

5. 看護の専門職者・自分自身のあり方について

看護で癒された体験や看護に期待する患者の声を聴いて，学生は看護職として持ち続けたい目標や専門職としての看護の役割について考えられていた。しかし一方で，死を意識しながら

生きている患者と向き合い，本当に必要とされる看護をするには，自分あまりに未熟であるとも感じていた。これらのことから，よりよい看護職者となるには知識・技術を身につけ，さらに深めていくこと，そして自分自身が人間として内面を深め，成長する必要があることに気づいていたといえよう。

それは，死を意識しながら一日，一時間，その瞬間を懸命に生き続け，様々な課題を抱えているがん患者と家族の真剣な姿や声を直に見て，聴くことができるからこそ，「専門職としての看護を学習する自分」と「人間としての自分」への課題について深く考え，学ぶことができたと考える。

6. 謙虚に学ぶ姿勢について

多くの学生が「声を聴く」ことは，看護の対象となる人々のニーズを理解し，必要とされる看護を実践するために必要不可欠であるとしていた。そして，その意味と必要性について学ぶことができていた。

それは，がんという診断を下された人の心情を思いはかることはできても，真に理解することはできないという限界を知った上での，看護としての姿勢であり，原点でもある。そのことを学生は患者の暮らす場所，あるいは集う所に行き，実際の暮らしぶりや価値観などに関わる生の声から，そのあまりに真摯で必死に生きる姿を目の当たりにしたからこそ，謙虚に学ぶ姿勢が求められており，必要であると学ぶことができたと考える。

医療のプロさえもが知らない，教科書にも書かれていない患者・家族の経験に基づいた知識が語られており，「その言葉に耳を傾けるととき，私達は，患者さんを無条件に弱いものとみなす自分達こそが，実は多くの学びの余地を負う者であることに気づく」（大熊，2006）。その声を聴くことによって，当事者である患者・家族に私達は育てられていることに気づくことができる。このような姿勢こそが，倫理について深く学ぶ基本的な姿勢につながると思われる。

これらの学びは，看護者の倫理綱領（日本看護協会，2003）の人間の生命，人間としての尊厳及び権利を尊重する条文1，信頼関係を築

き、その信頼関係に基づいた看護を提供する条文3、知る権利及び自己決定の権利を尊重・擁護する条文4、守秘義務の遵守と個人情報の保護に努める条文5、継続学習や個人としての品行を維持する条文8、条文13に分類される内容といえる。

今、当事者が主体となる参画型社会が求められ、当事者の活動が社会に大きな影響を与えており(上野, 2003), 看護の対象となる当事者の語りを通して、「生命や人間の尊厳」を肌で感じ取ることが必要であると言われている(森川他, 2004)。そのためにも看護学の授業に当事者の声を真摯に聴く教育方法を位置づけることが倫理的な学習姿勢を養う一助になると考えられる。

VI. 本研究の限界と今後の課題

がんサロン訪問による科目を選択した学生数も少なく、また一施設での限られた科目での結果であり、一般化には限界がある。今後、この教育方法を継続してデータを収集していくことが必要である。

また、3年次生の横断的なデータであり、今後は、サロン訪問前とその後の学習との関係について縦断的に明らかにしていくこと、個々の学生の学びについても明らかにしていくことが課題である。

VII. 結 論

看護の対象である患者の視点から対象理解を深められること、倫理的な学習姿勢を養うことをねらいとしてがんサロン訪問を取り入れた。学生の学びを検討した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 学生は人間の生命、人間としての尊厳、知る権利、自己決定のための支援、信頼関係の形成とそれに基づく看護、プライバシーの保護・尊重、専門職をめざした自己研鑽、謙虚に学ぶ姿勢の6カテゴリー、23サブカテゴリーについて学んでいた。
- 2) がん患者とその家族は病気の進行・転移、死への不安や孤独な状況の中で真剣に生きて

おり、学生は生命の有限を生きる人々に直に触れ、生命の尊厳や信頼関係の形成などを学ぶと共に、学生に今をどう生きるのか、看護者としてのあり方を問う機会ともなっていた。

- 3) 当事者の声を聴くことは、看護者としての倫理的ケアへの感受性や問題意識を養う機会と考えられた。

文 献

- 上野千鶴子, 中西庄司 (2003): 当事者主権, 岩波新書, 2-5, 東京
- Katz, A. H (1993): Self-Help in America-A Social Movement Perspectives. / 久保絃章 (1997): セルフヘルプ・グループ, 101, 岩崎学術出版社, 東京
- 角田直枝 (2008): 専門看護師として患者・家族と向き合うことー在宅ケアから考える向き合い方, 緩和ケア, 18 (1), 15-18.
- 田島玲子, 大澤美佐恵, 富松保宣 (1999): 老年看護学における対象理解, 第30回日本看護学会論文集 老年看護, 51-54.
- 名和久子, 磯部英子 (2003): がん患者の話から感じ取った学生の学び, 第34回日本看護学会論文集 看護教育, 34-36.
- 日本看護協会 (2003): 看護者の倫理綱領
- 平野文子, 秋鹿都子, 別所史恵 (2007): 看護教育におけるCancer Survivorの「病と共に生きる」体験談からの学生の学び, 島根県立大学短期大学部紀要, 1, 67-74.
- 松村三千子, 松浦妙子 (2002): 成人看護学授業における模擬患者体験学習の重要性, 看護教育, 43 (2), 128-133.
- 森川三郎, 中谷千尋, 伏見正江, 仲沢富枝, 野澤由美, 山下貴美子, 上田康子, 渥美一恵, 藤波久恵 (2004): 「当事者参加授業」の教育成果と概念モデルの検討, 山梨県立大学短期大学部紀要, 10 (1), 17-29.
- 山勢善江, 緒方久美子, 大塚邦子 (2000): 障害者の手記を用いた対象理解に関する研究 2ー理論を用いた障害受容段階の分析ー, 日本看護学教育学会誌, 10 (2), 80.
- 山本君子 (2010): 看護教員が向き合う倫理的

がんサロン訪問における「患者・家族の声を聴く」看護学生の倫理的学び

ジレンマ, 看護教育, 51 (4), 280-285.

平野 文子・別所 史恵・坂根可奈子

Ethical Learning of Nursing Students' "Hearing the Voice of Cancer Survivors and Families" by their visits to Cancer Salon

Fumiko HIRANO, Fumie BESSHO and Kanako SAKANE

Key Words and Phrases : Cancer salon, Hearing the Voice, Ethical learning,
Nursing student